
世界トリップなんぞいう乙女ゲームのような状況におかれているんですか 30字以内で説明し

mikoco

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんで私が異世界トリップなんぞいう乙女ゲームのような状況におかれているんですか30字以内で説明してください。

【Nコード】

N7402R

【作者名】

m i k o c o

【あらすじ】

私、篠原未依はギャルゲー大好き！なちょっと危ない14歳。

乙女ゲームユーザーさんにただ平謝りするばかりなくらい、

乙女ゲームが苦手です。魅力が分かりません。

ちょ、だからなんで私が異世界トリップしてるんですか？

逆ハーレム？最初の一文字いりません。

ちよっと今月発売のギャルゲーどうしてくれるんですか！

魔王？んなもん知らんわ。

この小説はあくまでも主の趣味半分で書いております。
生ぬるくみまもってやってください。

主人公史上最強？！

1

異世界トリップ。

まあよくある乙女ゲームの展開ですねわかります。

っていう感想くらいしか持てない駄目人間。

それが私、篠原未依^{しのはちみい}だったりします。

でもね、全国の乙女ゲームのユーザー様

ごめんなさい。

乙女ゲームの魅力がわかりません。

絶対にギャルゲーの方がいいと思うんだ。

18禁でもいいんだよ。

ぜったいに切れ長の男の人の絵よりも萌え絵の方が好きなんだ。

だからこそ謝っておきます。

こんな自分が異世界トリップしてごめんなさい。

まずは、ことの経緯を話そうではないか。

それは入浴中でした。

明日発売のギャルゲーのことを考えてハアハアしてました。

そしたら、なんとまあ気絶してました。

ここからは乙女ゲームちつくかな。

天使だか神様っぽい人に聞かれました。

「助けてください。」

なんですか。つかなにをですか。

「私は、この世界とは違う【異世界】の神です。

神は、直接世界に干渉することは出来ないのです。

だから、お願いします。

私の世界を助けてください。」

なにを言ってるんですかこの人は。

どこの厨二ですか。

「では、貴方を強制的に飛ばします。

貴方は今日から【導く者】です。」

なにこの人。

どこまでも人の話を聞かないおっさんですね。

せめて萌えキャラの姿で登場しろよ。

そんなことを考えていたら、

ぱちんっ！

意識を失っていました。

「じじじじじ。」

はい。

意識が戻りました。

なんですか。フツーはもう少し前ふりがあるでしょうね。

つか自分はさっきまで風呂に入っていましたのに、

髪もかわいてて、ローブっぽいもの着てて、なんですかこの中世魔導使みたいな服は。

「みんな、にんげんさんがいるよー。」

あらあら、なんだかかわいらしい声が聞こえます。

「ほんとだー。」

「しっこくのおとめだー。」

ちよつとまてや。

なんだ【しっこくのおとめ】って。

「えつと・・・。」

私は呆然とするしかありませんでした。

だって小人みたいな半透明なひと（？）達がたくさんいらっしやるよ。

さすが異世界！

まじでぷりちー。

「皆！漆黒の乙女が怖がっていますよ。

落ち着きなさい。

始めまして、漆黒の乙女。

私は【始祖精霊】の一人、空間の精霊です。」

「はい。はじめまして？」

なんか空間の精霊さんがお辞儀をされましたよ？

「貴方は、まだ何も知らないのでしょうか。」

あのへボ神め。まったく適当に飛ばしやがって。人をなんだと
思っ
て
ん
だ
！
？」

空間の精霊さん。貴方とは気が合いそうですよ。

「私達は、精霊。」

この世界では神以上に尊い存在とされています。

精霊は存在するすべてのものに宿ります。

そして貴方は【漆黒の乙女】。

私たちを司る、精霊にとっては【神】同等の存在。」

「はっ？」

そのとき私の口は大きく開いていたことでしょうね。

異世界にきて早々、神様よりも強い存在から、【神】っていわれました。

「えーっと。人違い、ですよね？」

「いいえ。」

私たちの姿は神官以外の一般人は見えませんし、貴方のその黒髪と黒い瞳はこの世界ではありえません。

つまり、漆黒は特別！。

漆黒の乙女だけが、私たちを駆使して戦えます。

その魔法を【夢魔法】というのです。」

なんですかとりあえず異世界ってこんなに厨二くさいんですか？

「まあ簡潔に言えば、

貴方はヘボ神に選ばれてこの世界にトリップして、さらに【漆黒の乙女】という精霊を司る役割を与えられました。

あなたはその力 【夢魔法】 を駆使して、この世界を救わなければなりません。

その3本柱、

【導く者】、【繋げる者】、【伝える者】の一つとして。」

「えーっと、辞退は？」

「無理です」

ですよねー。

長々と説明ありがとうございました、空間の精霊さん。

「全ての元凶は、あの神様にあるんですよね？」

「はい」

・・・次あったらボコル。

「はあ。」

とりあえずさげんでいいですか？

「異世界トリップしちゃったよー……………」
「……………」

#2

ごめん。

やっぱり可愛く「キヤー！」とか言うの無理だわ。

とりあえず現状整理と行こうではないか。

私は篠原未依。14歳。

乙ゲーの主人公のように、眼鏡はずせば美少女！

とか、本人は気がつかないけど実は美少女！

なんていう素敵なスペックは残念ながら存在しません。

今日の前にいる精霊さんについて。

空間の精霊さんは目を見張るほど美しい。

バックに光とかがありそうなくらい神々しい。

ギャルゲー的には、主人公になにかとアドバイスをくれるわけあり
(ドS)美人養護教諭って感じ。

んでその周りにいる精霊さんは。

コロボックル。

こんな表現がぴったりなくらい可愛い。

アニメキャラがデフォルメされたちびキャラみたいなの。

うん。

とにかくかわいい。

「かわいいは正義！」

「漆黒の乙女・・・？」

空間の精霊に怪しい目で見られました。

ごめんなさい。

「えっ」と。私は篠原未依、です。

漆黒の乙女とか呼ばれるの好きじゃないから、

ミイってよんでください。」

「わかりました。ミイ。

では貴方には世界中の精霊たちとまとめて

【契約】して頂きます。

精霊たちに認められて初めて真の【夢魔法】の使い手となるのです。

」

あー。

よくある（のか？）ルートですね分かりました。

「では、貴方の本能に従ってください。」

は？

「貴方は【導く者】なのです。神がどう選んだか知りませんが、貴方には資格があります。」

【導く者】よ、今扉を開くのです。」

ちょーーーーー！

意味分かりません。

えーっと、なんですか？

いきなり振らないでください。

私の専門は学園系ですよ？

アドベンチャー系RPGは2、3本しかやったことないんですよ！

もういいや。

本能に従いましょうか。

でも下手に難しい言葉使うのも得意じゃないんだよね。

汝とか、我とかもつわけわからん。

じゃあ普通にいきましょう。

当たって砕ける！

「世界中の精霊さーん！

聞こえてますか！

はじめまして。

私はさっきこの世界にトリップしちゃった漆黒の乙女の篠原未依っています。

今の感想は、正直難しいものを押し付けられすぎて困ります！

っていう動揺だけです。

【漆黒の乙女】だかなんだか知らないけど、

とりあえず使えるものは使うが私のポリシーなんです。

だから、私に力を貸してください！

世界を救うのが恩返しになるんだったら、まあぼちぼちがんばります。

皆さんとってもかわいいし・・・、ってあれ何言ってるんだろ？

私は勇者でも世界の救世主でもなくただの篠原未依なんですが、

押し付けられちゃったし、なんだか楽しそうだし、

とにかくがんばりたいんです！」

なんだか、だんだんいろんな気配が近づいて気がします。

重たい？ぜんぜん。

むしろあつたかい。

「だからお願い！力を貸してください。

ちょっと私服を肥やすくらいのことはすると思いますが、

悪用はしません！

助けてください！お願いします。」

『ミイよ。漆黒の乙女よ。

汝の願い、聞き届けたぞ。

我ら世界を司る精霊は、汝に力を貸そう。

精霊の力は強大だ。

しかし、汝は必ずこの世界を【正しき道】へ【導く者】だと我らは確信した。

汝は我らを司り、我らは汝を護り貫こう。

汝はだれだ？」

「私は。」

すげーーーーー！

頭の中に直接響いてくるよ。

つかこの精霊さんすげえかつこいいぜ。

私もこんな感じに演説したかったわ。

なんかもう口が勝手に動くよ？

「私は、【導く者】！」

『導く者よ。忘れるでないぞ。』

汝は我らと共にあり、決して独りではないのだと。『

ぱちんっ！

あー。

またこの音か。

意識がどんどんどんどん薄れて・・・。

切れました。

「んっ・・・？ここはどこ？」

別に。

草原の上になっころがつているだけでした。

体中がぼかぼかしてます。

もしや！

私、もう魔法使えんの？

すげえ！

『精霊・・・さん？』

『なあに？』

『あ、いるんだ。これからよろしくねっ！』

『『『『はいつ！』『』『』』

たくさんのアンサンブルが聞こえたのは、気のせいではないだろう、

と思った。

#2（後書き）

とりあえず、

ごめんなさいww

#3

とりあえず、ここどこですか？

残念ながら私は方向音痴なんですね。

まあなんとかなるでしょう。

「ん？」

ちよっ！

目の前に瀕死状態の黒猫がいます。

これは、可愛いそうです。

猫さん。

申し訳ないけどわたしの魔法の実験台になってください。

「 治癒 」

指先を猫さんに足あて、エネルギーを放出するイメージで。

すると、みるみるうちに傷がふさがっていきます！！

すっ、すげえー！

「 洗淨 」

血の跡とかが消えていきます。

なにこれ、半端ないわ。

魔術つてもつとめんどくさいものかと思ってたけど、意外に簡単ですな。

「・・・にゃ？」

黒猫さん、目を覚ましましたね。

「君が、僕を治してくれたの？」

喋った。

もういいや。

異世界だしなんでもあり。

ほら、あの狸型の青いロボットもしゃべるから問題ないよ！

「そう。ちょっと試したくて。ごめんね？」

「ううん。ありがとう！このご恩は一生忘れません！！」

そうっすか。

いやー。こっちも実験できたし。

「僕は一生貴方に仕えます!!」

ちよいまち!!

はい?

だから、君達は気が早いんですよ。

残りの人生をこんなゲームに費やすって?

「僕は……。もうオオカミに襲われたとき死ぬ覚悟でいました。

でも貴方が助けてくれたからこの命はあるんです!

ならば残りの全ての人生をかけて貴方にお仕えするまでです!」

えーっと、うんやめとき?

「お願いです!こんな僕では……。ダメ……。?」

そんなうるうるの瞳はやめて。

わたし、小動物に弱いんです。

「わかりました。えーっと、名前は?」

「ありません。貴方がつけて、ますたー。」

ちよ!

いま「ますたー」にときめいちゃったよ、相手は猫さんなのに。

「じゃあ・・・伊織。」

別にアイドルマターの某積ツンデレっここらとったわけじゃないんだかねっ！

「イオリ・・・ですか！すごいいい名前です！ありがとうございます！！」

じゃあ【使い魔契約】をしましょう！」

また契約か。

猫さん（伊織）の前足が突き出される。

「僕、イオリ〃シノハラは生涯貴方にこの身を捧げ御仕えることをここに誓います。」

そして伊織が私の鼻をぺロっと舐めました。

かわいいなあ。

「契約の精霊よ。我らを祝福したまえ。」

すると、

ぽうつ、と光が私達をつつみました。

そしてなんか変形してますよ、伊織さんよ。

光が消えるとともに、私の伊織君の変形は完了したようです。

彼(?)はなんと人型になってました。

栗色の髪の毛に茶色の瞳。

顔はこのアイドルですか？みたいなの。

うん美形。

でもね、でもね問題はそこじゃあないんだ。

彼は見た目11歳くらい。

つまり

シヨタですよ!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!

[illegible]

しかも猫耳っ!!!!!!!!!!!!!!

[illegible]

この瞬間に初めて異世界トリップしてよかったと思いましたね。

「よろしくおねがいします。ますたー。」

ああ、至福だあ！

抱き疲れたよお。（ハアハア）

ちょ。

変態っばいですね。

うん。

ちよつと情報操作。（自己暗示ともいう）

いおりきゅんはかわいいけどときめいたら画面の中の女の子たちに失礼じゃないか？！

私は二次専になるって、きめたじゃん！

小学校のとき男の子に振られてから・・・。

「うん。大丈夫！」

「伊織ってちよつと言いくいし、本当の名前っていうとまずいんじゃない？」

「はい。使い魔の名前を主人が呼ぶときには自動的に魔力が込められるんです。」

やっぱり。

「じゃあ私はイオってよぶから。」

「はい！！ますたぁー！！」

わたしは異世界トリップ一日目で、かわゆい男の娘（猫耳付き）を使い魔にすることが出来ましたっ！

#3（後書き）

これが書けたらもうなんでもいいやww

4

まず情報整理といきましょう。

「イオよ。」

「なんですか？ますたぁー？」

この娘はなんでいちいちこんなにかわいいんだろうか。

神様。(。(グッジョブ！！

あと萌えキャラとか出してくれたら拝むから。

「えっーと。イオは私がだれかわかる？」

「……。」

なんですかこの沈黙は。

つかそんなに見つめられたら照れるじゃん。

「ますっ、ますたぁーは【漆黒の乙女】なんですか……？」

「うん。そうらしいよ。」

あともうひとつ。なんだっけなぁ……。

あ、あれだ。【導く者】だっけ？」

「三本柱の一つなんですか?!」

「あと、伝説の【夢魔法】の使い手とか・・・?」

「なんなんですかましたあっ!」

半泣きの状態でイオは私に訴えてきたよお。

かわいい・・・。

「僕なんかますたあーの使い魔になっていいんですか・・・?」

「うん。」

ごめん即答します。

だって、猫耳シヨタなんてそんなナイスすぎるモノを手放すわけにはいきません。

それに癒しだし。

「ますたあーは優しいんですね。」

ありがとう。

実は下心しかないけどね。

あ、抱き枕になってもらおう。

今愛用しているまりんちゃん抱き枕は家だし。

「とりあえずー。」

身を固めなくちゃね……。』

そう思っていたときに、パカパカと馬の音（複数）が聞こえてきた。

「お前は誰だっ？！」

てめえこそだれですか。

「我々は王家直属の白騎士団だぞ――！」

そんなの知らん。

「えっーと。このわたしを誰だとおもってるんですかあ？」

よし。れっつ水戸黄門！

「この黒髪が目に入らぬか。」

「まさか貴方は……。」

【漆黒の乙女】
・
・
・
?」

[illegible]

「我々はなんと失礼なことをしたんだ。」

乙女よ、どうか我々をお許してください。」

水戸黄門すげー！

「とりあえず、わたしは王様（？）に謁見するべきだとおもっています。」

だから、わたしを王宮に連れて行ってくれますか？」

そついやここ森のなかだったなーなんておもいつつ騎士団（？）をにらむ。

騎士団っていえリーゼントのぶんぶんいつてるヒトしかおもいつかねー。

「もっ、もちろんです！」

どもども。

「あ、ちなみに王家に女の子っていますか？」

ここ重要だからねっ！

ここでフラグを建設できるかどうかが問題で・・・。

「いえ。王家には女性はいらっしゃりません。」

女王陛下は若くしてお亡くなりになり、お子様は男の子 3人の王子しかおりません。」

ちっ。

ここでツンデレ王女様に

『あ、あんたのことなんか全然頼りにしてないんだからっ・・・。

かつこいいなんか思っ てないんだからね!』

みたいなことを言われたいと切に願っていたのに・・・。

またはドS女王・・・。

「それがどうかなされましたか?乙女。」

そんなことも知らんのかという目で見られてるけど気にしない!!

「いえ。わたしはミイっていいいます。よろしく。」

王子か・・・。

ここでルートの逆ハー成立しそうで怖いな。

てかここしかないだろ!逆ハー。

ここを突破すればいいんだあ!

うん。

とりあえず王宮にレッツゴー!

もしかしたら女装好きの王子とかいるかもしれないしっ！

#5（前書き）

今回はちょっと短めです。

#5

てっててーん。

王宮に到着しましたあゝ。

いやあー。

ある程度は予想していたけど、これはデカイ。

うん。もう超でかい。

どれくらいって・・・小学校×200くらい。

でも、それを顔にしたら負ける気がする。

「ま、ますたあー？」

イオ（人型）はかなり緊張しているみたいで、ブルブル震えています。

「どうしたの？」

「ますたあーは緊張とか、動揺とかしないんですか？」

すでに異世界トリップしている時点でもう同様ないし。

なんでもありだよ。

「しないね。」

キリッとちゃんと効果音が聞こえるように言ったよ……。

なんかそれよりさあ、この騎士団めっちゃ目立ってるんですけど。

自分あんまり目立つのすぎじゃないんですね。

むしろ嫌いだから。

あーゆーおーけー？

そつえば、なんで私異世界の言葉とかしゃべってんの？

実は日本語が世界の共通語ですとか言われたらキレるよ？

『僕が通訳しているんだよお。』

頭の中に声が反響してます。

『僕は【言葉】の精霊。

ミイの言葉をこの世界の言葉に【置換】しているんだよお。』

ナイスっ！

なにこの子めっちゃ使えるんですけど。

簡単に言えば無期限のほんやくこんにゃくを食べたってことです。

『文字はさすがに無理だけどね。』

わかりました。そっちは頑張ります。

「ミイ様。こちらの門からお入りください。」

了解した。

「イオ、いこう。」

私が通されたのは王様たちの部屋ではなくめっちゃ豪華な更衣室でした。

まっ、まさかこのルートは・・・。

「ミイ様。」

ひっ。

そこにはたくさんのメイドさん(?)がいらっしやいました。

「そんな泥だらけの格好で国王さまに謁見するなんてありえません。」

たしかに泥だらけですよ。

だけどつ。

まさかドレスとかに着替えるなんて言い出すのでは・・・。

そして私は剥かれました、裸に。

「まあなんて艶やかな髪なんでしょう・・・！」

別に手入れとかしてないです。

風呂に入れられて、髪いじられて、化粧されて、

そして私はメイドさんたちの着せ替え人形にされました。

「ではこの服を着てください。」

そういつて見せられたのは、ふりっふりのまっピンクのドレスでした。

「却下ですっ！！！！！！！！！！」

ドレスなんて着たことないし、無理です。

メイドさんたちを押しつけて、クローゼットに向かいます。

とにかくとにかく一番マシな服を探します。

一番マシ・・・。

残念ながら真っ白なワンピースしかありません。

でも模様とかなないからこれでいいや。

「これにしまつす!」

てっけてーん。

マッハの速度で着用しました。

有無をいわせないうちに。

はいきました。

多分いままでで最高記録なんじゃないですか？

「どうですか？」

思わず聞いてしまいました。

だってみんなが唖然としているんですから。

きつと・・・あー、残念すぎてっつてことですね理解しました。

「う、美しいです。」

ぎりぎりで言いましたね。

目が点になっているもん。

「この靴を履いてください。」

そういわれました。

そこにはワンピースと同じく真っ白な靴がありましたね。

微妙にヒールになっていますが。

「こちらです。」

ひとりのメイドさんに連行されました。

なにこれめっちゃ歩きにくいんですが。

私スニーカーLOVEだから仕方ないか。

迷路みたいにくるくる回り、そして一つの扉の前に立ちふさがりました。

「さあ、ここです。ミイ様。

ここには3人の王子様と、わが国の王がおります。」

いまさらながら後悔してきました。

そして扉をおもいつきり開けました。

6

扉を開けて、私はこの世界に来て初めて後悔しました。

ぶんぶんするんだもん。

フラグの建つ匂いが・・・。

仕方がないので、すたすた歩いていきました。

「ようこそ。【漆黒の乙女】よ。」

・・・。

もうやだ。

えーっと、簡単に説明すると

私が今いる部屋には王様と王子様（×3）がいるわけで、

しかもみなさんハイパーイケメンなわけ。

よくある乙女ゲーム的な展開。

むしろこの世界はもう乙ゲーじゃん。

やだ。

登場人物Aでもなんでもいいからギャルゲーがよかった。

でも来ちゃったもんはしゃーないし、適当に挨拶でもしておこうか。

「はじめまして。私は【漆黒の乙女】です。

【漆黒の乙女】って呼ばれるのは大嫌いです。

名前は篠原未依。苗字が篠原で、名前が未依です。

ミイって呼んでください。

異世界から来た善良な一般市民ですので、マナーとかそういうのはまったく持ってしりません。

どうぞよろしくおねがいします。」

さあどうだあ！

ここまで冷たく適当にあしらえばフラグは建たないだろう！

悪いな。

だって家に私の嫁たちがいっぱい待っていてくれるんだもの。

てめえらみたいな現実リアルにお付き合いしている暇はないんだぜ！

すると王様がお腹を抱えて笑い出した。

「ミイ殿は面白い方じゃのう……。」「

ちよ。なんだよ。

「わらわには全て聞こえておるのじゃよ。」

はあ？なんだよこのクソジ・・・。

おつといけない。丸聞こえだった！

「わらわはこのコキノスの国の王。」

アーサー「コキノスだ。」

ほれ子供達。汝らも挨拶しろ。」

アーサーっていうと某英雄を思い出すなあ・・・。

つかよくわかんねー。

とりあえずこのひげもじゃが王様で。

「たしかにこのひげはちと邪魔なのじゃよ。」

まだ聞こえてるのかよ！

でもこのじーちゃん個人的に好きだわ。

「私はエドワードと申します。」

曲がりなりにもこの国の第一王子を務めております。」

うわっ。

なにこのザ・イケメン（百均っぽいな）。

かつこよく言うとな物静かで知的？かしこそーな人だ。

物腰が柔らかい。

あわれもない言い方をすると、流されやすそうな優男ですねわかります。

「つくく……。」

じーちゃんにはダダ漏れっぽいよね。

なにも言わないけど。むしろ笑ってるけど。

「俺はアレックスだ。第二王子。

騎士団の隊長をやってる。腕っ節はこの国で一番だぜ？」

うわー。

ドン引き。

熱血そーで松岡修造みたい。

これでゴリマッチョだったら多分吐いてたな。

まだ細マッチョでよかったね。

でも、この人たぶんお腹真っ黒だよ。いろんな女の人を弄んでそう。

「・・・。レンバルト。第三王子。」

それだけ。

この王子様、相当無口みたい。

でもこの王子様のなかで一番好印象だよ。

「ミイ殿よ。よくぞわが国に参った。」

いやー。ただこの国に落とされてきただけですよ？

「そなたはなかなか、いや。かなり面白いのう。」

わが子たちを初対面であれだけ罵ったのはそなただけじゃぞ。」

いらんこと言うなよクソジジイ。

「わらわもすこしは精霊と対話できる故、ぬしが異世界から参ったことはしっておるぞ。」

身が固まるまでこの城にいたまえ。」

「ありがとうございます。」

私は素直に頭を下げた。

「までまで。そなたがわらわに頭を下げることなどない。

おぬしは【漆黒の乙女】であり、【導く者】でもあるのだぞ？

わらわがこの国の統治者なら、おぬしはこの世界の統治者にもなりえる。

おぬしはこの世かいの誰よりも立場が上なのじゃよ。

そうだ、レンバルト。

おぬしはどうせ暇じゃろう？

ミイ殿にこの世界について教えてさしあげろ。

ミイ殿。遠慮なくこいつを使ってよいぞ。

それから　ぬしの使い魔　たしかイオリといったな？

そのものにもよろしく頼むぞ。」

それだけ言つとじーちゃんは出て行きました。

これで心置きなく脳内プレイ（ただしギャルゲーに限る）ができるぜ。

#6（後書き）

名前適当ですみません。

ちなみにコキノスというのはギリシャ語で赤という意味です。

#7（前書き）

今回はレンバルト君視点です！

彼にはまあいろいろとがんばってほしい次第ですww

こんな駄文・乱文だらけのあれな文章ですが、
どうぞお付き合いください。

#7

SEID レンバルト

世界を守る3本柱が召喚された。

いまやこの世界ではこのニュースで持ちきりだった。

そしてそのうちの一人、【世界を導く者】がこの国にいたときだが俺は正直興味がなかった。

俺は一応この国の第三王子ということになっているが、

俺はまだ成人していないし、たいていの国の仕事は兄貴たちが片付けていた。

俺が外に姿を見せるときはなにかの式典だけ。

いつも城の中にこもって【研究】をしていた。

国のことも世界のことも、俺にはまったく関係ない。

ずっとそう思っていた。

だけど、俺は見てしまったのだ。

【漆黒の乙女】を。

その少女が入ってきたとき、生まれて初めて俺の中の【なにか】が動いた。

なんなのかはわからない。

たとえばそれが【恋】なのか。

たとえばそれが【憎悪】なのか。

たとえばそれが【嫉妬】なのか。

俺には今も、ずっとわからない。

でも、確かに俺は彼女に惹かれた。

生まれて初めて、他人に惹かれたのだ。

俺が惹かれたその少女はとても神秘的だった。

そして、美しかった。

少女は純白のワンピースを身に着けていたが、

その髪と瞳はまさにその二つ名にふさわしい漆黑だった。

彼女が精霊を従えているということもあるだろうが、それにしても、

その少女は神秘的で、美しかった。

そして他者を惹きつけるカリスマ性があった。

きつと兄貴や親父も同じことを思ったに違いない。

いつもにこやかな微笑を浮かべている上の兄貴が、微かに動揺しているのがわかった。

その少女はミイと名乗った。

そして一番驚いたのが、少女の心の中の眩きだった。

俺と親父は他人の心の眩きを感じることが出来た。

親父はきちんと制御できるらしいのだから、俺はまだ使いこなせない。

勝手に他人の声が聞こえるのだ。

それはそれで面倒な力なのだが、多分この力を使って一番驚いたのがこのときだった。

俺が今まで知っている女で、俺たち兄弟をみて赤面しなかった奴はいない。

少女は心の中でなんと言うことかため息をついたのである。

そして俺には理解できない単語を並べて

やだ。

といったのである。

こともあろうことに一国の王である親父をクソジ（以下省略）呼ばわりし、

上の兄貴を流されやすそうな優男、

下の兄貴をお腹真っ黒（遊ぶ・・・）

よく初対面でここまでの罵詈雑言を吐けるな、と俺は思った。

ここまで見た目と中身が一致しない人間は始めてみた。

親父は俺が何を思っているのかを見透かしたようで、

俺にこの少女の世話を押し付けたのだ。

この少女の訪れは、俺のこれからの日常の変化を告げていた。

8

とりあえず国王の謁見（？）は終わったみたいです。

さて・・・。

これからどうしようかな。

なにが理由でここに飛ばされてきたのかもわかんないし（世界を救うとか抽象的すぎだしー）、

情報収集から始めないといけないね。

そっぴやイオ、どこ行ったんだろうか・・・。

まあとりあえず帰ろうぜ！

私はさっきあてがわれた着替の部屋の扉を開きました。

すると、着せ替え人形にされている哀れな使い魔がいました。

これはびっくり！！

だってイオ君が着用しているものが

いわゆるメイド服だったんですもの！！

「ますたぁー……！」

涙目で私を見つめる使い魔と、満面の笑みのメイドさんたち。

双方を見渡して、私は無言でメイドさんたちに指をつきだしました。
ぐっじょぶ！と。

「まっ、ますたぁー……？」

ごめんね。

「すっごく、似合ってるよ？」

鼻血が出そうなので、そろそろ退散しましょうか。

そしてこっそりとメイドさんに耳打ち。

「いいのがあったら、とっておいてくださいね。」

それは主人からの着せ替え人形としての使用許可でした。

外に出ると、第三王子が扉の外にいました。

まあ！なんたる偶然でしょう。

・・・。

もしかして、私、フラグ建てた？

いやいやいや。

その可能性は否定！！

この王子様は国王様から『漆黒の乙女の面倒を見よ』っていう命令がでているんだもの。

「ついて来い。」

そっいつて私が連れてこられたのは、超 巨大図書館でした。

「ここには、この国のほとんどの書物がある。

この世界の歴史についての本も沢山ある。

自由に使っていい。」

えーっと、この男の子は私が全然この世界のことを知らないことを心配してここに連れて来てくれたわけか！

意外に気が利くんだねえ。

「ありがとうございます。」

くると第三王子に背を向けると、私は呪文を唱えました。

「 召還 」

すると、ぽんつとかわいらしい音をたてて精霊さんたちがたくさん飛び出してきました。

『 おとめだー！ 』

『 ほんとだー！ 』

『 まさか、こんなちんけなとこにいらっしやるとはー！ 』

『 やっほー！ 』

ここにある本の数だけ精霊さんが飛び出してきました。

「 これは・・・？！ 」

後ろにいる第三王子もただならぬ力の大きさを感じているのかもしれないですね。

「 私に、貴方たちの知識を授けてほしいの。 できる？ 」

精霊さんたちは少し考えて、こういいました。

『 ざんねんだけどー 』

『 それはできませんー 』

『ぼくたちのちからはー』

『とてもおおきいですー』

『おとめはひとのみにあるからー』

『ぼくたちを受けいられるだけのー』

『すぺつくないのですー』

『それにー』

『ぼくたちがかたるのはー』

『かならずしんじつとはかぎりませんー』

精霊さんたちはすこししょんぼりしています。

『おやくにたてなくてー』

『もうしわけないのですー』

「ううん。ありがとう!」

私は図書室を後にしました。

9

はあー。

私はため息をつきました。

当てにしていた書物からの効率のよい情報収集はさすがにむりか・・。

そういえば、この第三王子様に接触を図るのは、頭よくない？

「えーっと、そこのおーじさま。」

びくつと、第三王子の体が動いた。

えー。

なんですか、私そんなに嫌われてんの？

軽くショック・・・。

「別に、そういうわけではないっ！ー！」

突如第三王子がしゃべりました。

え・・・なにコイツ。

地の文まで丸見えなん？

ちょ。こまるわね。

「封鎖」

これで、大丈夫？

あ、うん。大丈夫かな。

「えー、王子様。

こほんこほん。

うーんとね、この通り私はまあ異世界から召還され散った、

かわいそーでかよい女の子なわけですわ。

だから、この世界の常識なんぞが通じない私にいろいろ教えてくんね？？」

くっそ。

もっ和对人スキルを上げておくべきだった！！！！

ろくに学校も行かずに（俗に言う不登校である）、

家でだらだらネトゲとギャルゲなんてしてるからかあ・・・。

自業自得？？？？

でもでもでも！！！！

もともと私がありませんのこんな世界に召還されちゃったのはあれよ。

神様のせいだあ――――！！！！

「くそつ。今度会つたら殺ス。」

思わずつぶやいた私の剣幕に圧倒されたのか、

王子様はコクコクと頷いてくれた。

そして重たそうにその口を開いた。

「俺のことは、名前で呼んでいい。」

じゃあ明日、第23執務室。
L

なんか、無口っつーより根暗？

顔はイケメンなのに、根暗??

「ありがとう、レンバルト……さん？」

私は戸惑いつつ、名前で見ると、うら若き少年は、

顔を真っ赤にして去っていった。

「つーか、今絶対、フラグ建ったよなああああ……！！！！！！！！！！」

「！！！！！！」

こんな高感度上昇意味ないっすよお！！

そして私は急にふらっと着て、その場にばたっと倒れてしまった・。
・。

#10（前書き）

はい。

割と急 展開です。

すみません・・・。

#10

はい。

気がついたらモフモフのベツトの上でした。

そしていろんな人が私の顔を白い顔で覗き込み、

精霊さんたちは私が目覚めた瞬間テンションが上がってました。

「えーっと。」

口をあけた瞬間、

「まっ、ますたー……!!!」

•
•
•
○

•
•
•
•
•
•
•
○

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

抱きつかれました。

泣きつかれました、使い魔に。

あー思い出した。

私は今、異世界トリップしてたんだ。

この間、0・3秒。

「乙女?!」

いろんな使用人っぽい人たちも、喜んでいます。

私は、

私は、啞然としました。

本当に、心の底からびっくりしました。

たった一人の、

こんな無力な小娘の体調に、

これだけたくさんの人たちの心を動かすことに。

こんな私の無事を、

こんなに沢山の人たちが、喜んでくれるなんて。

本当に、これは本当に

「ふざけてますよ。」

声は震えていました。

「ありがとうございます。」

体の調子確かめたいので、

すみません、少しだけ一人にしてください。

精霊さん、あなたたちも。ごめんね。」

そうして、納得したように人々は去っていった。

これが本来あるべき姿なのに、

急に寂しくなつて、

心細くなつて、

うれしくなつて。

涙が溢れてきました。

あーあ。

こんなの【漆黒の乙女】なんかじゃない。

ましてや【世界を導く者】なんてもつてのほか。

私は、私は、

ただの【おんなのこ】だった。

そうだ。

私は、私の本質は弱虫。

哀れな【おんなのこ】。

報われない【いじめられっ子】。

私なんかが、こんないろんなひとの心を動かしていいわけがない。

ああ。

いまさら分かった。

私は強くて守られた、乙女ゲームの主人公ヒロインなんかになれない。

弱いけどハーレムエンドを築けるような、ギャルゲの主人公ヒーローにはなれない。

だったら、

ダツタラ、ワタシハ、ワタシハモウ・・・。

逃ゲルシカ、ナインジャナイカ。

こんなの、こんなの反則だ。

だって私は、ただの女の子なのに。

「ばかみたい。」

そう。舞い上がった自分が馬鹿だった。

私のこんな卑屈な性格はまだ消えてくれないし、

私はこの世界にきてまでも弱虫で、

人類最強の力を手に入れても、

私はまだ【弱い】ままだ。

涙が溢れてきた。

おいおい自分急展開ワロタって、つつこみたいくらいに、

私の心は高速で弱っていく。

あーあ。

本当に馬鹿だ。

「もう、いいや。」

私はそういつて、前の世界から逃げた。

別次元^{ネット}に逃げ込んで、

楽ちんな世界に居座っていた。

きつと、それを繰り返す。

でも、でも私は。

「また、繰り返すの？」

もう一人の私に問われたら、

私はどうする？

「そんなの、やだな。」

それが本音、か。

たぶん、これが本音。

逃げたくない。

立ち向かいたい。

向き合いたい。

そう、私は

強くなりたい。

そう思えるくらいにはなった。

「よいしょ。」

すこしばくさい掛け声とともに、

私は立ち上がった。

あとほんの少し。

強くなろう。

だったらあと少しだけ、

前を向こう。

それでいい。

そして、ちよつとずつ、

ちよつとずつ、

【それ】に気づかせてくれたこの世界に、

恩返しをしていこう。

たぶん、それでいいんだ。

『やっと目覚めたか。』

そのとき、私の内側から声がした。

「・・・はあ？」

おまえ、だれやねん。

『我は三本柱を助く者。』

再び我が眠りから覚めたということは、

三本柱が現れたこととしるし。』

「はあ。」

なんだろうこれ。

設定的には、主人公に的確なアドバイスをくれる近所のお姉さん
でいいの??

『我は三本柱を助け、力を保管する者。』

いまからお主に【導く者】の力を解放しよう。』

そういつて、私の内側から真っ白な光が現れて、

私はまたまた気絶してしまった。

あー。

やっ
ちやっ
た。

1 1 行間 "私"
(前書き)

これは複線かな。。

わりとシリアスです

#11 行間 “私”

そんなにかしむかしではない昔に、

私はちゃんと幼稚園児（皆勤賞）をやって、

小学生（葬式以外皆勤賞）をやりました。

でも、私は中学に入学し、その1ヶ月後に

世間で言う不登校に、

さらには引きこもりになってしまったのです。

それには深い事情がありますが、

まずは私に親しい2人の人物を

紹介することにします。

まずは一人目。

私の義弟おとうとの篠原哉斗しのはらかなとである。

私はこればかりはあるアニメやゲームの主人公に共感できるのだが、

この義弟、重度のシスコンであり

もう地球から飛び出していけるくらいチートなのである。

顔は良くて、頭も良くて、運動神経はこれでもかつ！！てほど良い。

くそつ。

なんでこんなのが義弟なんだ。

でも、小さいころは良かったんだ。

まだ義弟ではなかったし、

よく女の子に間違えられて、

今だったら絶対にあーんなことやこーんなことを・・・。

・・・こほん。

いまや私よりも20?は高い。

うらめしや。

というわけで女子にはモテモテ。

男子には人望がある、こにチート野郎。

こんなんの義姉^{おねえちゃん}なんてろくな事ないさ。

私が小6の冬に、

お母さんと義父さんが再婚して、

私たちは姉弟になった。

そして小6の3学期になって、

あいつがうちの学校に転向してきて、

持ち前のシスコンパワーと、ハーレム機能を発揮し、

私はめでたく逆恨みされて、でもまじめな私はきちんと学校に通った。

そして中学は、

私の体のうちの数少ない使える機能、そう【頭】をつかい、

義弟を全寮制で山の中のチート学校に入学させた。

（まあ代々彼の家系はその学校に入ることになってたんだけどね。）

そして私はその3学期に唯一、私に普通に接してくれた男の子に恋をした。

まあ、ありえなくはないよね。

その男の子が

柊疾風
ひいらぎはやて

こいつはクソ明るくて、かつこよくて、いつの間にか皆の中心にいる、

太陽みたいな奴。

そして私の幼馴染である。

疾風は、皆から敬遠されて、影でかなりひどい逆恨みにあった私を、

唯一支えてくれた。

うれしかった。

私の素直で単純な部分が動くくらいには、いい奴だった。

で、小学校の卒業式。

これまたテンプレな展開でしてね。

私は勇気を振り絞って彼に告白しようと思いましたよ。

すでに先客がいて、その子の告白を断ってしまった。

私はどうしたって？

だってこの会話を聞いちゃったんだよ。

「私の告白を断ったのって、篠原さんがいるから？」

「・・・へ？」

「だって、いつもあの子のこと庇うよね、柊君。

すきな？あの子のこと。」

彼女の目つきがぞっとするほど怖かったんだ。

にぶちな少年は、そんなことにも気づきもしないで、

うぶな少年は顔を真っ赤にして、

「だっ！だれがあんなブサイクをつー！！！」

そういつて、逃げてしまったよ。

彼女はにっこり笑ってこういった。

「聞いたでしょ？ざまあみろ。」

そして中学ではもう疾風にかかわらないようにした。

そしたら疾風は私に付きまとうようになった。

前と同じように。

昔に戻りたがった。

するとまたまた嫉妬と逆恨みがでてきて、

私は学校にいられなくなつた。

疾風にあうのがいやで、

私は家に引きこもつた。

もともと両親はほとんど家に帰ってこないし、

疾風は長期休暇しか家にいない。

家族にごまかしようはいくらでもあつた。

そんな廃人が、私、篠原未依なのである。

12

「あ．．．？」

私はまたまた倒れてしまって、

どうやらまたまた皆が心配してくれているみたいです。

いつもの私が復活したのと同時に、

三本柱のなんたら〜ってやつも甦って…。

ここまでは私の頭の中の状況確認。

そこで、そこでここにはいけない人がいた。

ここにいるはずのない人。

リアル
現実の世界の住人が。

「．．．は？」

そこには、こちらを睨んでいる某義弟と、

気まずそうに目を伏せている某幼馴染がいました。

「ミイ様、この方たちは・・・その、

ミイ様の知人だと言い張ってしまして・・・。」

メイドさんAが言い終わる前に、義弟君が動きだしました。

「すみません、俺たちは姉ちゃんと積もる話があるので、

しばらく退席願います。

ね、姉貴？」

私はこくこくと頷くしかありませんでした。

それを見て、不安そうに使用人さんたちは出て行きました。

（そりゃ、さっきと同じパターンですから）

「ますたー、ぼく・・・。」

イオもこちらを見えています。

「大丈夫。なんかあったら、呼ぶから。」

そして、私たち以外の全員が部屋を出て行ったところで、

義弟君がはあ、とため息。

「姉ちゃん、なんで言わなかったの。」

「なっ、なにを？」

私はついビビッて声が裏返ってしまいました。

だって、哉斗は、面影はあるけれど、

なんか前よりも成長してるんです、全体的に。

細マッチョになってるww

「なにをつて、わかってるだろ。」

「どうしてこの世界にいるのかって？そりゃ、こっちがききた・・・」

「ちげーよ！」

私はがんばってはぐらかそうとしましたが、

途中でさえぎられてしまいました。

「姉ちゃん、なんで言ってくれないわけ？」

不登校だって。引きこもりだって。

姉ちゃん食事と風呂以外全部ネットしてんじゃん。

学校も行かずに。

んで俺にも、父さんにも義母さんにも嘘ついてさあ。

なんでだよッ。」

哉斗は、私のことなのに悲しそうで、つらそうで、苦しそうで

何より悔しそうだった。

普通なら、ここで『ごめんねっ、かなくん……。』

みたいな展開になるのであろう。

しかし私は究極に卑屈なんだよ、哉斗。

だから今の私の中には苛立ち。

怒りが爆発しそうだった。

「そんなに俺のこと信用できないのかよッ！！！！」

その一言にプツンと、私の堪忍袋の緒が切れたよ。

「……。えんじゃねえ……。え。

ふざけんじゃねえよ、哉斗。

信用？

してんに決まってんでしょうが！

私たちは血が繋がってなくても家族なんだよ。

なんで言ってくれなかった？

言えるわけないじゃん。

あんたたち、それしつたら間違いなくそのこたちシバくでしょ。

女の子にてえあげるなんて、サイテーよ。

んなこと身内にさせられるわけがないでしょ。

それくらい考えなよ。

なんのためにその頭がついてるわけ？？

なんのためのチートなわけよ？」

私の剣幕に押されたのか、戔斗はしょぼんとしていた。

「だからって、姉ちゃんが傷ついていい理由になんてなんねえだろ。

それにそいつらは姉ちゃんにありえないことしたんだぜ？

それに、その理由が俺やコイツなら、それは俺の……。」

「違つてしょ。」

それは『俺たちの責任』とかいったら殺すわよ。

いい。

それだけは言わないで。

いっちゃいけないでしょ。

あんた、失礼だよ。

なに他人の責任背負おうとしてるわけ？

偽善者きどりもいいところよ。

私は好きであんたたちと一緒にいるの。

学校に行け、うつん、行かなくなったのも、

全部私が決めたこと。

これからも、全部私が決める。

私のやること奪わないでよ。

私の十字架、勝手に背負わないで。

これは私が一生もって行くの。

私は乙ゲーの主人公じゃない。

守られるアホで可愛い主人公なんか、だいつきらい。

私は強くなる。

もう、逃げないから。」

そして私は自然に微笑むことができた。

久しぶりに、哉斗と、疾風に向かって。

「あんたたちも、逃げんなよ。」

私は、未来の私に宣戦布告をした。

#13 (前書き)

更新がたびたび遅くなってすみません・・・。

今回はまあ急展開??でわないと思いますが・・・。

13

さてー。

私、何を恥ずかしい台詞言ってるんでしょうか？

いやあね。

わかりますよわからなくもないですよええ。

うん。

なあ久しぶりに現実の世界の住人とであって混乱してたんでしょ。
う。

でも、なんでこんな展開になってるんでしょうかねえ？

なんで私、押し倒されているんでしょうか？

えっと、話は先ほどの台詞に戻ります。

その後、義弟君は満足げに出ていったんです。

んで私はこの流れに乗って、さっさと退場じようと思いましたよ!!

そう。脱兎の如く!!

しかしそこで（まだフラグがあったのか）幼馴染に呼び止められちゃいました。

「未依、話があるんだけど。」

はい。美形特有のイケボで。

「なっ、なによ?」

思わず声が裏返ってしまいました。

あれおかしいなあ。

こんな展開知らないよ??

「俺、お前に謝んなきゃいけないんだ。」

は?

「その…。お前に起こったいじめのきっかけは俺。」

「だからそれはアンタのツ」だから聞けつて。」

一瞬なにが起きたかようわからなかったけど。

手でね、口封じされましてしまったようです。

「その低級ないじめを拡大させたのも俺だし、

操ってたのも俺だし、

拳句の果てに未依を学校から追い出したのも、俺。」

私は本当に言葉が理解不能になってしまったようです。

ええ……。はい。落ち着きましたが。

だがなんでそんな真似を・・・??

不思議そうにしていると、疾風は言いにくそうに切り出しました。

今後は、私の独り言込みでお送りします。

「そのさ。俺の中に悪魔がすんでるんだよ。

（なにその厨2設定？）

ソイツいわく【三本柱】の精霊の一人とかほざいてるんだけど、

（つかもう一人ってアンタなわけ？？）

ソイツが出てきてから俺は力をもらって、

（ということは覚醒済みかぁ。）

ときどきこっちの世界にもきて勉強したんだ。

（うわーそんな初心者ルートじゃないんだけど。）

俺は強くなっだし、賢くもなったとおもう。

（それ自分で言う？）

でもそいつは俺を世界を守る勇者にして、元の世界に戻した。

（すでに勇者気取りですかぁ。）

俺は、俺は怖くなっただよ。

（だからなにが？？）

俺はもう一般人じゃないし、そのあんま死なないし。

（もとから一般人じゃねーよ）

だから大好きな人に嫌われるかもしれないって。

（へーそうですか。）

お前に、嫌われるかもしれないって。

俺は悪魔にそそのかされて。

その人に俺だけしか残らないように頑張ったんだよ。

いつも輪の外にいるように。

大変だったんだぜ??

だってそいついつも気がつかないうちに真ん中で立ちすくんでるんだもん。」

そこまで聞いて私の頭は真っ白になりました。

「はあ？

ちょっとちょっとと！！

私、アンタにフラグ建てた記憶ないし?!?!!

つかアンタ小6んとき私のことフツタじゃないですか!!」

私、もう啞然。

疾風の言う【大好きな人】は、家族とか友達とかじゃなくて、

異性として。

あいつの目が、そう物語っている。

「なにこの展開??」

ちょっと待って聞いてないよ。」

私があたふたしているうちに、

乙女ゲームの恒例行事ですが、

押し倒されました。

「あれ?あんなの照れ隠しにきまつてるじゃん。

振ったって言うけど、未依は俺のこと好きだったわけ?

ふーん。

じゃあここで犯してもOKなわけだ。」

ようやく、疾風の言ってた【悪魔】の意味を理解したところで、

唇にやわらかーい感触のものが当たりました。

#13（後書き）

えっとですね。

もしかしたらこちらの小説、ムーン様梓にお引越しするかもしれないが、なま暖かく見守ってやってください。

誤字脱字などありましたら、ご連絡お願いします。

#14（前書き）

どうやら幼馴染は変態さんのようです。

#14

・・・。

ねえ。

いま私、キスされた？

うん。キスされた。

誰に？

昔の片思いの相手に。

そこまできてパチン、と目が覚めました。

私たちの間になったピンク色の空気なんてもう関係ありません。

とりま、抹殺しようか。

そう思った瞬間、足が男性の急所をごとんと蹴り上げました。

「イッターーーーー！！！」

少年は、叫ぶ。

そりゃ、痛いだろうよ。

オトコの体の中で一番びんか（ごほんっ。）

「ざまあみる。私のファーストキス奪うからだ。」

「未依って俺のこと好きだったんだろ・・・って。まじ？

未依、初めてだったの？」

これ、お前私のこといくつだと思ってんだ。

中2だぞ？14だぞ？？

引きこもりだぞ？

これは云ってて悲しいわ。

もちろん、二次元でならあーんなこともこーんなこともあれだけ
どww

「じゃあ俺は未依の初めて、もらっちゃったんだ。」

ちよ、勘違いされそうな言い方するな。

ちなみにアンタだって・・・。

「俺？俺はもうすでに童貞卒ぎ」はあ？」「」

私はその一言でぶちっと何かが切れたのを確認した。

煩いな。こんちくしょう。

人を弄んでんじゃねえ。

こっちはテメエのせいで引きこもりなんだ。

ネットしてアニメ見てゲームして通販行つて寝る。

そんな生活なんだよ！！

とにかく【怒り】という感情が私を取り囲む。

どんどん私が真っ赤になって、真っ黒になっていく。

ああ。私はどうなるんだろう。

『怒ってるの？』

そうよ。そうに決まってる。

『だれに？？』

アイツに。ううん。私を取り巻いていた世界に。

『『なんで？？？』』

あの世界のせいで私は独りになったんだもの。

憎いの。世界が全部。

だから、私は逃げたの

『『『じゃあ壊そうか？？？』』』

壊すの？いいね。壊しちゃおうか。

全部まトメテ。

壊シテシマオウカ。

ワタシヲ阻ムモノゼエンプ。

コワシテー。

だめだっ！！

おつと危ない。

明らかなる厨2思考に奔ってしまった。

世界を壊したら、私の大切なコレクションが危ないことになって
しまっ！！！！！！！

それだけは駄目。

この命に代えてもそれだけはっ、守るのだ！！！！

その刹那。

目の前に気絶した変態（幼馴染）が転がっているのを目撃した。

「私しーらないっ。」

そうだ。しばらくほったらかしにしちゃった伊織のところへ行こ
う。

メイド服とかナース服とかを愛でよう。

そして、少なくともいまは現実から逃れようよ。

ねっ。

#15 (前書き)

久しぶりの更新ww

15

なんだか知らない間に、旅に出る準備が整っていたようです。

というか、部屋に帰ってご機嫌斜めな勇者様（私）が部屋が真っピンクになってるのを見て怒り狂い、

「こんなところささと出てってやるボケが。支度しろや愚民ども」と逆ギレしたらしい。

……。

これ全部私だとさ。

王様は「乙女がついに頭角を表された」とか泣いて喜んでるし。

きもいんだっつーの。

怒り浸透中の乙女を見た某使い魔君は気絶しちゃうし。

そして今現在。

私は儀式の最中です。

なにやらハゲのオッサンがむにやむにや呪文唱えてるしw

「貴殿に我が国、そして我が世界の命運を託す。

貴殿は常に我らと友にあり、我らは常に貴殿と共にあるだろう。」

そして古びた杖みたいなもんをわたされました。

「これは【三本柱】しか使えない宝具でございます。貴方と世界に幸あらん事を。」

はあ。

ん？

そういや、私、この人たちの為に魔王とかなんとかとバトらなきゃいかんわけ？

私に何かメリットはあんの？

『それはあるぞ。』

今まで空気だった三本柱の人、あ、もうサンディーで良くなきゃ？
かっこいいしw

三本柱の人改めサンディーが言い出した。

『むしろ主は必然的に魔王を倒せばならぬ。』

でなければ主は自分のもといた世界に帰れないのだ。』

なるほど…。

つまり、ソッコーで魔王を倒してきたらもとの世界に帰れるってこと？

でも、そこまで帰りたいわけじゃない。

むしろ遠慮願うし。

『どちらにしても、主には【導く者】としての役目もあるのだ。そう簡単に旅は終わらぬ。

それは主の力どうこうの問題ではなく、世界の必然的事項。つまりは神からの因果によるものだからな。』

きたー！！

こいつテラ厨2じゃないすか！

神からの因果とかw

とにかく、私は歩き回ればいいんだろ？

世界を導くために。

激しく面倒だなー！！

16

【漆黒の乙女】は旅に出た！

……。

はい。みなさんこんばんわ！

【漆黒の乙女】こと私篠原未依は様々な人に見送られて魔王退治の旅に出たのです。

そして只今絶賛迷子なうっ。

ただっぴろい森の中。

私は独り。

え？イオですか？

もちろん連れてきましたが、森の中に入った瞬間気絶＆猫化。

私の腕の中で、三途の川を渡りかけてそうです。

うん。

いろいろ問題ありありますが、あまり気にしないんです。そういうこと。

うーん。これからどうしましょう。

とぼとぼと道を歩いてる最中。

でーん！！

魔物登場っ！

「…はっ？」

巨大なんですよ！魔物。軽く10mはあるでしょうね。

ゴリラが退化した様な形相です。

正直めっちゃグロい…。

「ウホッ、ウホッウホウホウホッホ。（うはは、ネエちゃん抱かせろよ。）」

うん。ちょっと黙ろうか。

思わずそのクソゴリラを殴り飛ばしていました。

昇 天！

え？何、何が起きた？！

私のストレートってそんなに破壊力ありましたか？！

その時、後ろでザワザワッと草が動く気配がしました。

「また敵かよっ！」

杖を構えた瞬間。

「こんなとこにいたのかよ…。」

非常に可哀相な声が聞こえてきました。

「あー、おーじさま。なんでここにいらるのございましょうか。」

そこに居たのはコキノス王国第三王子様でした。

「親父に言われてきた。」

そういつて差し出された紙。

漆黒の乙女 ミイ^{II}シノハラ殿

我はこの度そなたを召還し、魔王討伐の旅に送り出した。

しかし、よく考えてみると、女子^{おな}を独りで旅に出すのは、

些か危険なことだと思う。

そのため、我が息子をそなたの旅に同行するよう申し付けた。

我が息子は、きっとそなたの旅に役立つと思うぞ。

我が国、我が世界の命運はそなたら3本柱にかかっておる。

どうか、そなたの旅に神の御加護が在らんことを。

と、律儀な日本語で書いてある。

…日本語？

おかしい。この世界では【日本語】は通じないはず。

「おーじさま。この文字読める？」

そういつてこくおーさまからの直々のお手紙を見せる。

「…これは【神語】だな。俺には読めない。」

「神語？なにそれおいしいの？」

「そもそも食えん。」

だめだー！

この人冗談通じない！

「神語とは、もとより神がこの世界にもたらした言われる言語だ。

世界の基盤となっている言葉、とでも云えばいい。」

「日本語があ？世界標準語にもなれない言語が？」

「これは、お前のもとより使っていた言葉か？」

「うん。母国語ってゆーより、今もこれを使って話してる。」

「俺には【レッド・スベル赤の言語】にしか聞こえないが？」

「れつどすべる？」

「ああ。これがこの国の標準語だ。」

「国？国ってたくさんあんの？」

「…はあ。」

おーじさまはため息をついた。

そつえばこの人の名前なんだっけ？

16 (後書き)

次回は、説明回ですっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7402r/>

なんで私が異世界トリップなんぞいう乙女ゲームのような状況におかれている

2011年12月19日10時48分発行